



図 84 平城京発掘調査位置図 1 : 40000

1 平城京と寺院の地理的環境

都城発掘調査部平城地区が発掘調査をおこなう平城京は奈良県西北部に位置する奈良盆地の北部、奈良市・大和郡市に所在する。京域は、東西約4.3km、南北約4.8kmの方形区画の東に、東西約1.6km、南北約2.1kmの張り出し部（外京）をもつ非対称形を呈する。

京の北・東・西は山に囲まれ、南には平野部が展開する。まさに風水にかなった地形に立地している。京の北に広がる奈良山丘陵は標高100～140mほどで、その北斜面には、平城宮や京内の寺院に瓦を供給した窯跡が複数存在する。平城宮北方にあたる丘陵のなだらかな南斜面には、4世紀末から5世紀前半に営まれた佐紀盾列古墳群が存在し、奈良時代には松林苑が造営された。左京の北に位置する丘陵南斜面には奈良時代の天皇陵がいくつも存在する。外京には東の春日山からのびる支丘が張り出し、その丘上に造営した興福寺は標高90mほどと京内では最も高い。平城宮は65～75m、最も低い羅城門付近は50m前後である。京の西縁は西ノ京丘陵にかかり標高は95mほどである。

右京を流れる秋篠川は、平城宮の造営が一段落した後に宮外に流路を付け替え、運河として用いられ京の西市に通じていた。左京の佐保川や菰川の一部も運河として利用された可能性は高い。このほか、東の春日山・高円山から流れ出る数条の河川は左京域を通り羅城門付近で佐保川に合流し、南へと向かう。

2 平城京と寺院の歴史的環境

平城京は、7世紀の下ツ道を基準に造営され、南北の中軸線上には朱雀大路が造営された。京内は条坊道路が縦横に配され碁盤状を呈していた。京の外周を囲む羅城は南面のみで、北・東・西面は条坊道路が京域を限る境界であった。条坊道路に囲まれた方形の坊には、離宮、宮外官衙、東西の市、貴族の邸宅や庶民の宅地が確認されている。近年では諸国の出先機関である「調邸」の存在を示唆する成果も出ている。

京内には官営の大寺院が造営された。廃都後、京域は徐々に田地化され、次第に大寺院の門前に人口が集中する。なかでも東大寺と興福寺、元興寺の門前郷は、中世



図 85 南西からみた西大寺周辺（2023年5月撮影）

以降、奈良の中心地となり、近世には幕府の直轄地となった奈良町が成立する。奈良町一帯は現在も開発が進み、奈良時代の遺構は希少であるが、奈良町の西方、南方の地は、近年まで水田が広がる農村地帯であり、古代の条里を色濃く残している。

奈良時代から法燈を伝える大安寺、薬師寺、興福寺、元興寺、西大寺、法華寺、唐招提寺などは、多くの歴史的建造物を有し、その境内は国史跡に指定されている。これらの寺院は、京外の東大寺や春日大社なども含めて世界文化遺産「古都奈良の文化財」の構成資産となっているところも多い。昭和41年（1966）に「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」が施行され、奈良市がその対象となった。その後、平城宮跡と聖武天皇陵、春日山付近の東大寺・興福寺・元興寺・新薬師寺、西の京の薬師寺・唐招提寺は歴史的風土特別保存地区に指定され、建物や街並みなどの保存がはかられている。

平城京域における発掘調査の多くは、都市開発による事前の調査である。その結果、国の史跡や名勝に指定され保存された遺跡も多い。平城京朱雀大路跡（史跡）、頭塔（史跡）、平城京左京三条二坊宮跡庭園（特別史跡・特別名勝）、旧大乗院庭園（名勝）、法華寺庭園（名勝）などがある。また、長屋王、藤原仲麻呂など、貴族の邸宅の位置があきらかになった。寺院の調査では、現境内の範囲外で奈良時代の建物遺構を確認しており、創建時の伽藍復元に大いに貢献している。このほか、条坊道路や庶民の宅地が随所で見つかり、奈良時代の都の様子をうかがい知ることが可能となった。

（今井晃樹）